

須賀川市市民交流センター準備企画

すかがわ、 めぐるめぐ

◎会いたいひとに会いにゆく

ディーン・フジオカさん

祖国、日本の外から故郷を想う

◎須賀川のデザイン

平半染工

◎すかがわの味

須賀川野菜 はたけ屋

秋・冬

2016
第2号

はじめに

本冊子「すかがわ、めぐるめぐ」は、「須賀川市市民交流センター」のオープンに向け、一人でも多くの方に関心を持ってもらい、利用していただくため、この春創刊しました。2号目の今号は「秋冬号」です。

「市民交流センターができるのが楽しみです」。今回、多忙のなか時間を割いてインタビューに応じてくださった俳優のディーン・フジオカさん。世界を飛びまわるディーンさんにも市民交流センターを知ってもらえたことは、とても嬉しいことでした。

「最近の須賀川は元気だね」。

近頃、そんな声をよく耳にします。地元の若者たちが運営している「Rojima」。そこには沢山の路面店のテントが立ち並び、楽しそうにそぞろ歩く家族連れやカップルの姿がありました。すれ違う笑顔や笑い声に須賀川の新たな動きを感じます。

地元で頑張っている人たちがいる。地元を飛び出し活躍している人たちがいる。縁があって須賀川に住んで頑張っている人たちがいる。「すかがわ、めぐるめぐ」は、このような人びとにスポットを当てていきます。

そして、ふるさとを同じくする人びとと、ふるさとが違ってても須賀川を好きになった人びとが、市民交流センターを拠点としていろいろな形で交流し、新しい文化を創造、発信してもらいたいと思っています。

須賀川市市民交流センター 『人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造』

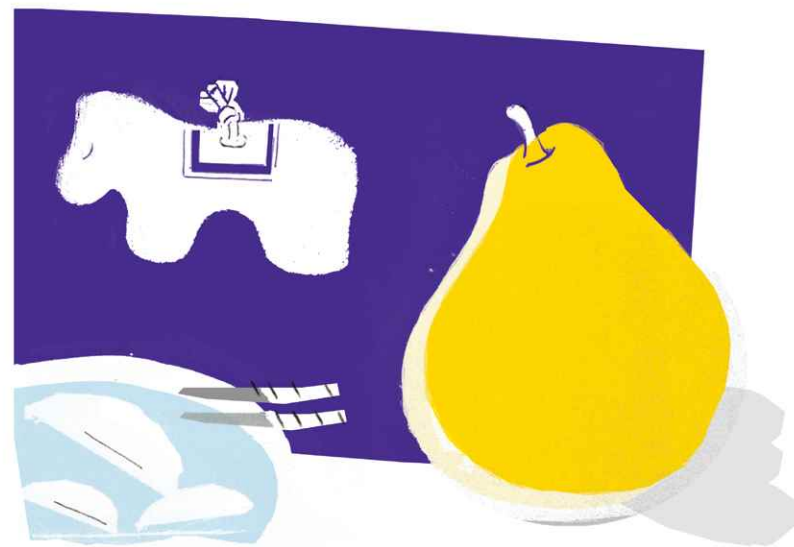
市民交流センターは、東日本大震災で甚大な被害を受けた中心市街地の再生、活性化のため、震災によって使用不能となり取り壊された総合福祉センターに代わる新たな施設として整備するものであり、「市民文化復興のシンボル」、また「中心市街地活性化の中核施設」としての役割を担うものです。本施設は、「人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造」を基本



須賀川市市民交流センター俯瞰イメージ

コンセプトとした、図書館や公民館などの生涯学習機能をはじめ、子育て支援、市民活動団体等支援、市民交流、賑わい創出など、多くの機能を有する複合施設です。様々な世代、立場、目的を持った人々が集い、交流し、活動することによって、まちなかに賑わいと活気が生まれ、その活力が市全体に波及していくことを期待しており、中心市街地のみならず「地方創生」、「地域活性化」の拠点となることを目指しています。

※詳しくは、市ホームページ及び専用ホームページ「声のパレット」をご覧ください。



設計と工事の現場から ①

みんなが使えるみんなのオフィス

須賀川市市民交流センターの建設現場から、松明通りを挟んで目の前。大きなガラス張りの真っ白な部屋があります。「須賀川オフィス」という名のこの場所について、スタッフの小島衆太さん、小林翔さん、岡本拓馬さんにお話を伺いました。

3人は、市民交流センターの建築設計を行う畝森泰行建築設計事務所のスタッフ。建築現場内にも監理事務所がありますが、通り沿いにも作ったこのオフィスを、市民に開放しています。

「交流センターの進捗状況や、建築設計とはどういうことなのかを共感してもらうためにこの場所を作りました。こう見えて僕たち、泥臭く辛抱強く作っているんです（笑）」（小島さん）

須賀川市図書館の協力のもと、ひとつのテーマで集められた本100冊が並んでいるのも、須賀川オフィスの特徴。図書館と同じように貸出をしています。サークルやボランティアなど、地域の人たちの活動場所としても利用できます。「僕がいつもここにいるので、近所の方が『遅くまでご苦労さま』と声をかけてくれたり、前を通った人が『ここ設計事務所なんだよ』って説明しているのが聞こえたり、少しずつ広まっているのかなと感じますね。市民交流センターと同様、このオフィスも生活の一部として、使い倒してくださいね」（小林さん）



左から岡本さん、小林さん、小島さん。「須賀川は自分の田舎と空気が似ていて好きです」とのんびり話す岡本さんに、「岡本くんはどこでも自然体だね」と笑うふたり

石本・畝森特定設計共同企業体の須賀川オフィス
(市民交流センタープロジェクト室)

須賀川市中町50-3 関谷ビル1F
0248-94-8320

◎もくじ

はじめに	02
須賀川市市民交流センター／設計と工事の現場から①	03
一緒につくる、考える ワークショップ2016レポート	04
会いたいひとに会いにゆく 第二回ディーン・フジオカさん（俳優） いま、出会う風景 02	06
須賀川のデザインを探そう② 平半染工	08
すかがわの味 第二回移動野菜販売「はたけ屋」 わたしの図書カード 02 吉田有希さん（DESIGN COMPANY）	10
あなたへの一曲 02 先崎純子さん 〔須賀川市歌〕須賀川小唄「普及推進の会代表」 触れ合う街 Rojimaの目指す道 編集後記	12
POINT OF VIEW 定点からの記録 随想リレー②	13
◎表紙 市民交流センターの建設現場 4月から本格的な工事が始まり、建設現場内では 施工を担当する三井住友・三柏JVの多くの職 人さんたちが働く。現場仮囲いを使った「関係者 1万人プロジェクト」も始動中。	14
16	15



“みんなの中にある“音”と“言葉”を引き出す”



“全員で目をつ むり声を出す”



“相手の目を見て、自分の気持ちを届けよう”

「ひとりひとりが書いたあの日を全部ばらばらにして、みんなが自分の文章で書いたそこに、ひとりだけじゃない、ほかの人の気持ちも入っていたのが感慨深かった」。(参加してくれた高校生の感想より)

*ワークショップの参加者25人が作った詩「あの日」は、下記サイトよりご覧頂けます。 <http://sukagawadeko.jp>

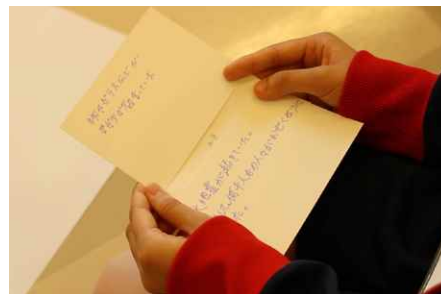


「一緒につくる、考える」ワークショップ
かえりたくなる街のつくり方
ワークショップシリーズ「かえりたくなる街のつくり方」は、須賀川市市民交流センターの開館後の具体的な利用方法について想像を巡らせ、皆さんの毎日がより充実していく道すじと一緒に考えていくことを目的としています。

は子どもからお年寄りまで、様々な人が行き交う場所です。挨拶や感謝の気持ちを言葉で伝えあう環境づくりを大切にしていきたいと感じる時間でした。
音楽家の青柳拓次さんによる「音」のワークでは、全員が手を繋ぎ大きな輪を作りました。声を出す自分の胸の振動と、繋いだ手から伝わってくる相手の振動とが響き合います。その後は、3パートに分かれて「スキヤット」という世界中の部族や民衆特有の意味をもたない言葉をメロディに、身体でリズムをとりながら繰り返し歌い、声を重ねていきました。「スキヤット」を繰り返し歌い続けていると、私という個人から「音」が前に出ていき、みんなの「音」になっていくような感覚があり、優しい気持ちに包まれました。そして最後は、詩をつくるワークです。手元に3枚の白いカードが配られました。テーマは「あの日」。「あの日」から思い浮かぶ「風景」「色」「音」を3枚のカードに書きます。書かれた紙は一度集められ、シャッフルされて、再び配られました。手元に戻ってきたのは、自分ではない誰かの「あの日」の「風景」、「色」、「音」です。各カードに書かれた「言葉」を使って、詩「あの日」を作りました。そして、青柳さんが奏でるギターと参加者全員の歌声にのせて、参加者25人の「あの日」を朗読しました。誰かの「あの日」が、みんなの「あの日」に変っていく、オトコトバツクリ。



“目の前に浮かぶ“言葉”を綴る”



“誰かの「あの日」の欠片を 受け止めて”

前半は、演出家の大谷賢治郎さんのかけ声に合わせて、演劇的要素を取り入れた身体を動かすワークです。参加者全員が会場全体を自由に歩きまわり、身体の緊張をほぐしていきます。表情に笑顔が出てきました。
その次は「言葉」の遊び。言語行為論といって、言葉を持つ「音」と「意味」を切り分けて、様々なコミュニケーションの場面で使っていくワークです。「ありがとう」と相手に言いながら、「行かないで」という気持ちを相手に伝えること。「本気で言ったら悲しくなっちゃう」との声も聞こえてきました。須賀川市市民交流センター



“ここで“言葉”を聴く”



“好きな人に伝える「ありがとう」”

「一緒につくる、考える」ワークショップ2016
かえりたくなる街のつくり方 Vol.04

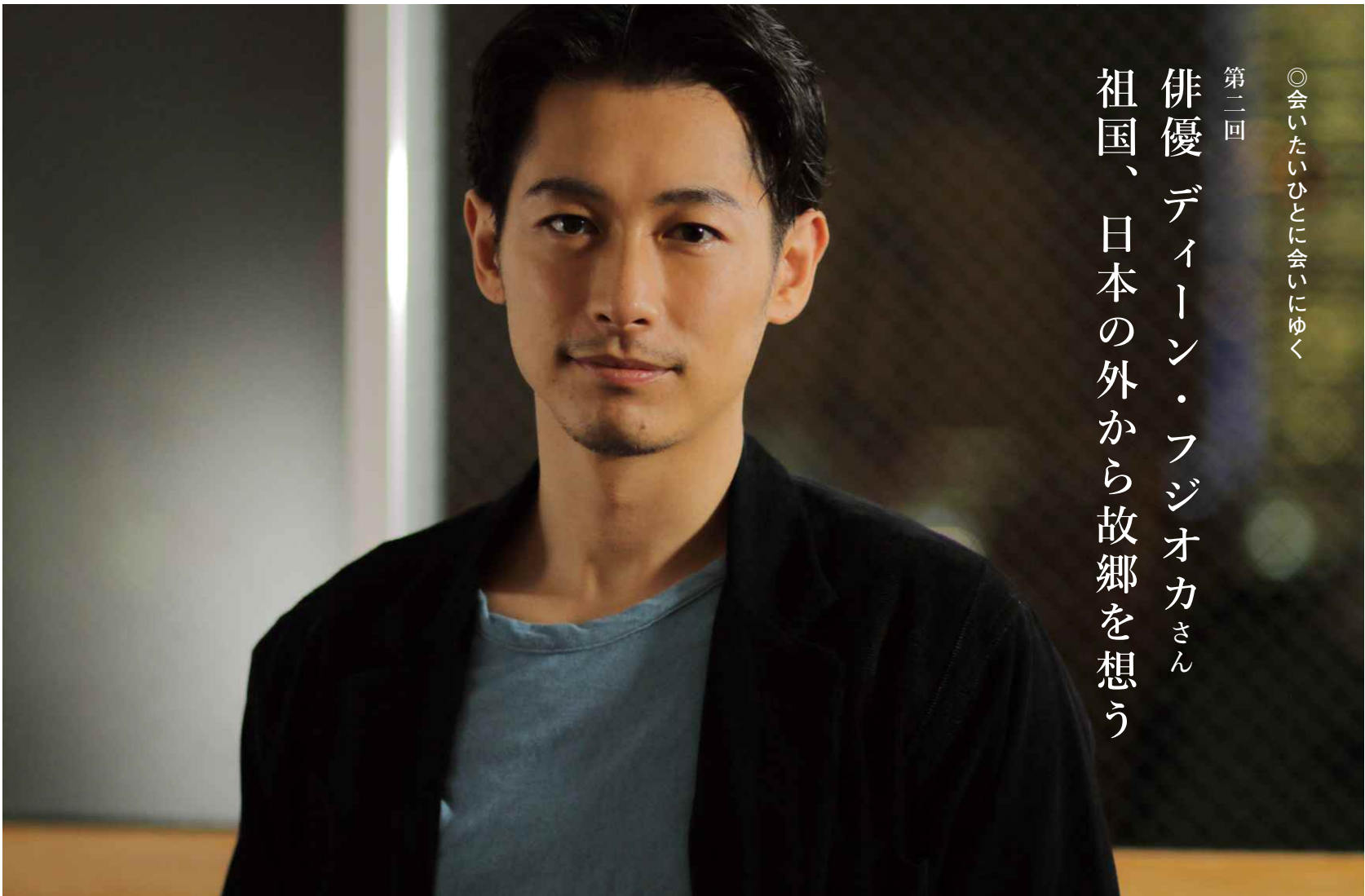
オトコトバツクリ

「音」と「言葉」でつくり出す場

緑豊かな7月の中旬、須賀川牡丹園内にある牡丹会館多目的ホールに、市内近郊に通う高校生たちが集まりました。市民交流センターの機能を知ってもらい積極的に利用する環境を一緒に作っていきたくと考え、企画したワークショップです。

児童演劇を中心に世界各地で舞台演出を行い、時には自身も舞台に立つ大谷賢治郎さんと、ミュージシャンのプロデューサーや映画音楽、絵本の制作など様々な分野で活動している音楽家の青柳拓次さんをゲストに迎え、プロの演出家と音楽家と一緒に、「音」と「言葉」を使って詩を作り、参加者全員でひとつの作品を作り上げるワークショップを行いました。

俳優 デイーン・フジオカさん 祖国、日本の外から故郷を想う



常に歩き続ける国際派俳優が 須賀川について考えること

香港でモデル、俳優としての活動を始め、2015年にはNHK朝の連続テレビ小説『あさが来た』に出演。ここ日本でも一躍人気となったデイーン・フジオカさん。すでにアジアで知名度が高かったという珍しい経歴もさることながら、5ヶ国語を自在に操り、ミュージシャンとしてもその才能を開花させるなど、多彩な魅力がさらなる注目を集めている。

そんなデイーンさんは須賀川市の生まれ。幼少期に関東へ越したものの、小学生の頃は夏休みや冬休みのたびに、祖父母の住む須賀川に遊びに来ていたそう。

「子供の頃の記憶は、須賀川のことばかりです。祖父母の家の近くに阿武隈川があったので、魚やザリガニを釣ったり。牡丹園にも行ったし、そこにあるアスレチックでよく遊びました。夏は虫をとって、冬はスキーをして。自然の中で遊ぶのが好きでした。須賀川の食べ物も思い出に残っています。果物がおいしいし、おばあちゃんの作るけんちん汁は大好物。おじいちゃんが削った鰹節と卵、醤油をかけた鰹節ごはんは、僕のソウルフードです」

ピアノ講師をしていた母の影響で、自然と音楽に親しむようになった。高校卒業後はアメリカ・シアトルに留学。

海外にいるときも、東京で仕事をする現在も、常に考えていることがあると言う。

「自分は福島県とすごく関係が深いと思っています。取材などでも常に福島県出身ですと言ってきました。福島や須賀川の魅力って何だろうって、日常的に考えているんですよ。実は僕、ピンチをチャンスにするのが好きなんです。苦境をアイデアで逆転することに興奮してしまう性質で(笑)。現実は見つつ、大きなビジョンも持っていたい。福島に変化の種を植えていけたらなと思っています」

須賀川の若者に将来のアドバイスをお願いしたところ、「30歳まではいろんな国に行って、できれば3ヶ国語をマスターしてほしい!」と大きな目標を掲げてくれた。

「2地点ではなく3地点の視点を持つことが大事なんです。そうすることで物事を立体的に捉えられるし、外から問題点が見つけれられる。自分や誰かの魅力を見つけることができるようになるはずですよ」

デイーン・フジオカさん

1980年、福島県須賀川市生まれ。香港でスカウトされ、2004年よりモデル活動を開始。2005年、香港映画『八月の物語』で俳優デビュー。台湾に拠点を移し、ドラマや映画に出演。2015年、NHK朝の連続テレビ小説『あさが来た』五代友厚役で日本でも注目を集めた。現在ドラマ『IQ246～華麗なる事件簿～』に出演中。

さらにアジア各国を回り、香港でモデル業をスタート。デイーンさんの今につながるキャリアが動き出した。

「音楽は僕にとってアイデンティティ。アメリカでジャズやヒップホップに出会ったし、ファーストアルバムにはその頃に吸収したものがすべて詰まっています。モデルの仕事は生活のために始めましたが、そのおかげで演技の仕事をもらうことができた。仕事として初めて、『これだ』って思えたのが俳優業でした。香港では僕は外国人。でも俳優をやれば社会との接点を作ることができたんです。僕にとって俳優は、自分と社会をつないでくれる役割ですね」

日本を出てから16年、ずっと海外を渡り歩いてきたデイーンさん。現在は日本での仕事が多いため、ジャカルタに住む家族と離れ東京で暮らしている。

「人間って仕事があるところに住まざるをえない。これから先も定住地を決めることはないし、自然の流れに身を任せたいと思っています。だからこそ、今こうして日本で仕事をもらえることがとてもありがたいかと思う。やはり祖国で仕事をするのは特別なものですね。須賀川のおばあちゃんがテレビをつけた時、孫の僕が映っていて、しかも日本語でしゃべっていたら喜んでもらえますから」





須賀川のデザインを探す②

平半染工

現代に生きる染めの伝統技術

天保15年（1844年）に創業。172年という長きに渡ってここ須賀川で染物業を営んでいるのが、平半染工です。染めの技法は様々ですが、ここ平半が最も得意とするのは「注染」。1反（約11m）の布を折りたたみ、防染糊で1枚分ずつ型を付け、上から染料を注ぎ込むという手法です。糊付けに精密な職人技が求められる伝統技法。機械染めとは異なる手作りの風合いが、見る人をホッとさせてくれます。

6代目となる代表の渡邊雄一さんは、経営者であり染めの職人。20代の頃はバックパッカーとして世界中を歩いたことも。家を継ぐ決意と共に帰国してから19年、伝統を大切にしながら新しさも取り入れています。インターネットで全国から注文を受けられるようにしたのもそのひとつ。その影響で現代風なデザインの注文も入るようになりました。「染めを行う中で自分が一番やりがいを感じるの、このデザインをどうやって染めようってイメージする時。注染でも、簡単にできる時もあれば複雑な場合もある。お客さんが一番求めている点を見極めるようにしています」

全国の染物業者が集まる会合に参加したり、伝統を絶やさない努力をしている渡邊さん。「でもこんな伝統があるんだと知ってもらえれば充分ですよ」という謙虚な姿勢が、私たちの印象に残りました。



平半染工株式会社
須賀川市南町219 ☎ 0248-75-6111
<http://hilahan.com>

祭りやイベント用、記念品としての手ぬぐいの注文が多く、そのほか暖簾、半纏、幟や大漁旗も作る。工場内は部屋で分かれており、技術を持った職人たちが各工程で集中しながら作業を行っていた。

大きく咲く、牡丹の花

須賀川市立第三中学校
木賊いずみさん



A LANDSCAPE FOR THE FUTURE



「第15回公益財団法人須賀川牡丹園保勝会 牡丹絵画展」に出展された作品。会場は須賀川市内の小学、中学生、高校生。今年は1291点もの作品応募があった。

「絵も音楽も共通していることは、描き加えたり、音を出したり、毎日ちよとずつ触れられること」。木賊さんの魅力は優しい笑顔と行動力のギャップにありそうだ。



展示会場で、一輪の牡丹の花が目にと飛び込んできた。「見たままを描いた」という、中心を包み込むように重なる大きな花びらは、一枚一枚、丁寧に描かれ、花びらの可憐さが際立つ。一方、緑一色に塗られた背景は潔く大胆。小さな頃から絵を描くことが好きだったという木賊さんは、美術部の3年生。

英語も頑張りたい!



9月の中旬、岡谷さんと一緒に、東京からL'asseの村山太一シェフと渡邊理奈シェフらが市内近郊の生産者さんを訪問。
写真はさとう園芸の佐藤雄太さんが育てるズッキーニやナス、イタリアの野菜ブンタレッラの畑を見学しているところ。



すかがわの味

第二回 移動野菜販売

「はたけ屋」 岡谷昭二さん

須賀川の野菜を日本一にしたい

開店から半年でミシュラン一つ星に輝き、東京を代表するイタリアンの名店となった東京・目黒にあるRestaurant L'asse。この店で使われている野菜は、ほとんどが須賀川産のものだ。「L'asse」に須賀川の野菜を仕入れているのが、移動野菜販売「はたけ屋」の岡谷昭二さん。岡谷さんは、「須賀川の野菜は日本一おいしい」と自信たっぷり語る。

須賀川で生まれ育った岡谷さん。東京のアパレルメーカーに長く勤めた後、2008年から地元同級生が作っている須賀川の野菜をワゴン車で販売し始めた。当初売っていたのは、自宅近くの都内の住宅街。ある日、岡谷さんからりんごを買った

男性が戻ってきてこう言った、「通りすがりの人間に売るような野菜じゃないよ。一流の店に売りに行きなさい」。それを聞いた岡谷さんはすぐさま東京の有名レストランを調べ、最初にイタリアンの名店である「L'asse」を突然訪れた。

「それまで須賀川の野菜を売っていい、おいしい、色が濃い、えぐみがないといった評価はもらっていません。だけどL'asseの村山太一シェフは『野菜本来の味がしますね』と言ってくれたんです。その言葉で自信を持ち、さらにいろんなレストランに営業に行くようになりました」

須賀川の産地直売所はたけんぼを通じ、その日採れた野菜が翌朝には

東京の岡谷さんの元に届く。厳しい放射線物質検査にも合格している、安心して食べられる野菜だ。現在は「L'asse」を始めとする都内の一流レストランに、毎日これらの野菜を届けている。

「新鮮、安全なのは当たり前。なにより須賀川の野菜は、商品力があるんです。須賀川は福島県の南部で、雪が5〜10センチ程度積もる地域。雪が毛布代わりになるので土が凍らない。気温の寒暖差が大きいので、野菜の味が濃くなる。絶妙な位置にある土地だから、奇跡のようにおいしい野菜が生まれるんです」
岡谷さんが目指しているのは、鎌倉、三浦、軽井沢などに並ぶブラン

ド野菜。さらには、何年掛かってでも日本一の野菜にしたいと意気込む。そのためには、見た目の良さではなく本来の味で勝負しに行く。多くの人に認めてもらえれば、それは福島の復興につながるのだと。
「今の須賀川野菜の味は、僕が子ども頃に須賀川で食べていたものと変わらない。ということはこれから先もずっとおいしいということなんです。若い頃に須賀川を出て東京に来た時、『うちの田舎は何もない』って思っていた。でも最近は『いやいや大したもんだわ』って思いますよ（笑）。須賀川とはこれからも仲良くやっていきたいですね」



L'asse村山太一シェフによる、須賀川野菜を使った「鯛のカルパッチョ」。ズッキーニ、間引ききゅうり、梨、トマト、枝豆、インゲン、長ねぎ、オクラと、野菜と果物はどれも須賀川産。「須賀川の野菜は味もいい香りもいい。おいしいから使う、それだけです」と村山シェフも絶賛。

Restaurant L'asse
東京都目黒区目黒1-4-15
ヴェローナ目黒B1 Tel 03-6417-9250

営業時間
ランチ: 12:00 ~ 15:00 (L.O. 13:00)
ディナー: 18:00 ~ 23:00 (L.O. 21:00)
定休日: 日曜、第1月曜

選者・『須賀川市歌』『須賀川小唄』普及推進の会代表
先崎純子さん

『異国の丘』

作詞：増田幸治 作曲：吉田正

昭和29年という戦争の爪痕が残っていた年に作られた須賀川市歌と須賀川小唄を後世に伝えたくて、市制60年を迎えた一昨年からの2曲を普及する活動をしています。須賀川小唄を作曲したのは、『いつでも夢を』など多くの名曲を生み栄誉賞を受賞された国民作曲家の故・吉田正先生。そんな吉田先生の名曲を演奏する吉田正記念オーケストラのコンサートが今年になって知り、ご縁があるのかも夫婦で行ってみたいです。

コンサートは吉田先生のお人柄を表すような素晴らしいものでし

た。中でも『異国の丘』という曲は、吉田先生が戦時中にシベリア抑留中、「生きて祖国に帰ろう」という希望を込めて作った曲だと解説していただき、コンサート中に涙が出て仕方ありませんでした。北朝鮮拉致被害者のご家族の方たちも、心がつぶれそうになる時に歌いになるのだそうです。

吉田先生は、須賀川小唄を作る際に何度も須賀川に足を運んでくださった優しい方。歌に込められた「生きなさい」というメッセージを、須賀川小唄と『異国の丘』を通して伝えていきたいですね。



先崎純子さん

正派若柳流 若柳智文として日本舞踊を教えるかたわら、2015年より須賀川市歌・須賀川小唄の普及推進の会代表として、2曲を現代的に編曲し、CDを製作。次の世代に伝える活動を行っている。



本と音楽とわたしたし



選者・DESIGN COMPANY 吉田有希さん

『空の走者たち』 ハルキ文庫

増山 実

子どもの頃、本屋さんに行くのが大好きでした。宗田理さんの『ぼくらの七日間戦争』をきっかけにさらに本が好きになって。須賀川市内の本屋さんが減っているのが寂しくて、デザイン事務所と雑貨店と書店を兼ねたお店を1年前にオープンさせました。

増山実さんの『空の走者たち』は須賀川が舞台ということで読んだ小説です。須賀川出身の有名人である円谷幸吉と円谷英二に關係のある女性マラソンランナーが、2020年東京五輪に出場するまでを描く物語。見慣れた風景が出てく

るので楽しいし、逆に新たな発見も多い。須賀川は坂と路地の町と言われているけれど、小説で読むことで、福島の空がっての広いんだなと改めて感じたし、この坂で親父に肩車してもらったなんて思い出したりして。

この店は基本的に僕が好きな本を売っていますが、若い人たちにはぜひ雑誌を読んで欲しいですね。興味がないことも教えてくれるのが雑誌のいいところ。僕は高校の頃、毎月10冊ぐらい雑誌を買っていました。知らない世界に迷い込むのってすごく楽しいですよ。



吉田有希さん

2015年、須賀川市内にデザインと雑貨と本のセレクトショップ「DESIGN COMPANY」をオープン。お客様がコーヒーを飲みながらゆっくりと選べる空間を提供している。

編集後記



「夜空の写真を撮っているんだけど、市内でいいスポットある？」と、撮影後、写真家の村越さんに質問が飛ぶ。

2016年10月スタイルウォーター
職人さんたちが今も胸に焼きついています。
の出来上がるまでに、約1万人近くの人たちがこの現場を出入りすることになると聞いています。撮影中はこちらの要望に、「ワッハッハッハッ」と大きな声と大きな笑顔で応えてくれた

礎となるもの

3トン近くある大きな鉄の固まりが、ゆっくりと慎重に宙を移動する。市民交流センターの工事現場内で働く人たちに表紙の撮影協力をお願いをして、現場を訪れたのは9月の上旬でした。基礎固めを終えて「建て方作業」という建物の主要な構造を組み立てている時で、普段は中々見ることの出来ない光景に目を見開くばかり。交流センターが出来上がるまでに、約1万人近くの人たちがこの現場を出入りすることになると聞いています。撮影中はこちらの要望に、「ワッハッハッハッ」と大きな声と大きな笑顔で応えてくれた職人さんたちが今も胸に焼きついています。

「めぐるめぐ」とは、ここでは「光景が極めて美しいさま」を「めぐるめぐ」と「〜」になっていくという進行形を表す「〇〇めぐ」を合わせた造語。沢山のひとが行き交う須賀川市市民交流センターで、「ひと」や「もの」や「ものごと」が巡り、沢山のきらめく光景が生まれる場所になることを願って、このタイトルをつけました。

◎本冊子に描かれたイラスト

「ル・レクチュエ」と「馬の土鈴」(P2)「松明あかし」「稲掛け作業の様子」(P15)郷土玩具の一つである「土鈴」は、イラストレーター濱愛子さんが須賀川市立博物館を訪れて描いてくれました。



触れ合う街

路地 de マーケット = Rojima の目指す道

店を出すことで、街と、人と触れ合う

毎月第2日曜日、市役所通りや結の辻、松明通りなどの広いエリアで行われている手作り市「Rojima」。空き地や空き家、既存店舗を利用して出店するマーケットだ。大きな宣伝はしていないにも関わらず、開始以降、毎月参加者が増え続けている。クラフト製品や飲食の販売のほか、DJブースやワークショップなどもあり、普段とは違う街なかを楽しむことができる。

運営は若者を中心とした有志によるもの。そのひとりである株式会社こぶろ須賀川の有馬毅さんは、Rojimaを始めたきっかけをこう話す。「街が元気になるためには、これまで街で頑張ってきている人に加えて、“新しい人”の出入りが必要だと感じています。そのような人と出会える場としてマーケットが有効だと思い、2015年6月からRojimaを始めました。すでにお店を持っている人はもちろん、お店を持っていない人も多く参加しています。街と接点を持ってもらい、ゆくゆくは事業につなげてもらうことが理想です」



市内でアイシングクッキー教室も開催する武藤菜美さん

まずはRojimaでこのエリアへの期待値を高める。それを見た人がエリアの内外で新たなアクションを起こす。そんな循環を目指しているという。「アイシングクッキーのワークショップを行っている武藤さんは、Rojimaをきっかけに地元須賀川にお店を持つことを目標にされました。これからは市民交流センターとも連携し、須賀川市全体で“新しい人”をバックアップしていけたらいいですね」

若手有志の運営チーム、スタッフのみなさん
左から有馬毅さん、常松亮一さん、阿部大輔さん 遠藤文康さん



路上ではフリースタイルフットボールユニット「SalTation」のShinya Watanabeさん



一杯づつ丁寧にハンドドリップして淹れてくれる、Ordinary Coffee
左・斎藤佑樹さん、右・佐藤倫さん



DJによる音楽が流れるメイン会場(結の辻)の受付ブース前にて。左からスタッフの村上良子さん、古山なつみさん、会田成美さん



POINT OF VIEW

定点からの記録



須賀川市市民交流センター予定地。松明通り沿いにあるホテルウィングインターナショナル須賀川の屋上より撮影。

随想リレー②

『創造』

何度意見を戦わせたであろうか。行政の考えと設計者の想い。新しい発想がなければ市民のニーズに合わない時代遅れの施設になってしまふだろう。しかし建設費や維持管理費が膨らむようなものは困る。行政には議会、市民への説明責任がある。利用者の立場（満足性）と納税者の立場（納得性）という二つの視点で検討し判断することが必要だ。創造とは、異なった価値観を互いにぶつけ合い尊重しながら創り上げていく作業なのではないだろうか。それは健全な対立であり、官民共同による挑戦でもある。そして今我々は、人とまちをつなぐ新たな公共空間を創造しようとしている。市民に愛される施設を創ると同じ願いを抱いて。

文・佐久間貴士（市民交流センター整備室長）

1962年須賀川市生まれ。県立安積高校、國學院大学法学部卒業後、1986年入庁。税務、都市計画、福祉、企画、人事、環境分野などに従事。介護保険の導入や合併後の新市総合計画策定、組織機構改革などに関わる。震災時は、災害廃棄物処理や放射能汚染対策に従事。2014年から現職。

写真・村越としや（写真家）

1980年須賀川市田中生まれ。日本写真芸術専門学校卒業。2011年日本写真協会賞新人賞、2015年さがみはら写真新人奨励賞受賞。写真集「火の粉は風に舞い上がる」他多数。